春色連理梅巻之五

第九齣　江戸

梅暮里谷峩作

ざいじ
大意の利益著明。彼(あち)の浅房(あさふさ)より沖(おき)へ出(いで)んとする扁舟(へんしう)の客(きやく)と記(しる)す。

ざいじ
大意(たいい)の利益(りえき)著明(ちよめい)。彼(あち)の浅房(あさふさ)より沖(おき)へ出(いで)んとする扁舟(へんしう)の客(きやく)と記(しる)す。

ざいじ
大意の利益著明。彼の浅房より沖へ出んとする扁舟の客と記

ヨきめ
他国もふくで行色をたつ
ろうぶ堂
ふうふ
支婦の縁の糸。結び
男
てくだされ
ナイ
ふりくお菜さん
男取
動ハ
このまゝ
ヤサ
一日も早く
チヤ
支那人

仕きる
まる
ら来
宜
の家
どこ
何知
く、きく「イヤ
こう
ろ
母
ぐち
早く
宜
り
ま
送って
ろ
ろきく「ハイ
ま
人
ろ
ろ
ろ

よもを波(なみ)うちかけてあらうまでもなく
ふ郎(らう)
えん
何(なん)のこと
ちゃ兎(と)郎(らう)もあいうふう此(こゝ)ろ
お迎(むか)ひ出(だ)のアノ爺(じい)さん房(ぼう)さんを
り爺(じい)さん房(ぼう)さんハあゝこと
引(ひき)取(とり)てくれるの
うの字(じ)源(げん)

老婆「ハイどうもお届けもの」
人「ハイどうもご苦労さま」
老婆「ハイ」
人「ハイ」
老婆「ハイ」
人「ハイ」
老婆「ハイ」
人「ハイ

あらまくも「たれ」かおもひ今きく「まんざ」ら
みせんもうらさん「まんざ」ら
ゆふべやア私も夜まて居まして
まつ
用ぐあるこゝろ「ヲット」待おへおもひ
居ても己ぐ用ぐ外でも無ぐ
ら
房さんの指ものゝ結ぶてる
らねへものよやア袖ぐ世界も
ぐスぐ朝もりゝ逼人を

進奉納

方梅彦

金壱両 時谷松洋屋五郎




京
山
金二両
清元
延津賀
寺嶋
植木屋
角兵衛
金高
武田
大り
金両
常盤津
春
金高
負
金両
神田山
祢宜
金高
果
金両
羽野
大江
彩次郎
金高
高
金両
羽野
常盤津
春
おきく
奉納
御寶前
奉納
御寶前
奉納

ろんへつらひもむ猥の
ちうくうきくふりうれしくふりうぐく
ーくへくふるもあさうくがこうろ
さもまゝ和ばべんさうきのあるろ
大ん
大事ぶ「おまへの番よ
もろあのさうきも
大騒ぶヨモウ九死一
ーいまうも
事ヨ「アヽおきて長屋迄
ちこ
ろかや
ぐ
ぶ
ぐ
ぐ
ぐ

第十齣

井二泊して元和の秋仙都をへて亀ヶ岡の麓微塵の暗夜ふ。

神彩冷然として霊亀廣東海のほとりに遊ぶ。

ぐりぐり経年して老色古純子の細妻の双をかこち。

ぐりぐり経年して老色古純子の細妻の双を

綿あんの風願ひ機のおと暗夜ふ。

綿あんの風願ひ機のおと暗夜ふ。

ぐりぐり経年して老色古純子の細妻の双を

ぐりぐり経年して老色古純子の細妻の双をかこち。

神彩冷然として霊亀廣東海のほとりに遊ぶ。

井二泊して元和の秋仙都をへて亀ヶ岡の麓微塵の暗夜ふ。

ヤラトひきずりて。ろじの中を覗き男「モウチット女「ハイまことにすみませんがおぐしの方へ男「ヘイ女「ハイまことにすみませんがおぐしの方へ男「ヘイ女「ハイまことにすみませんがおぐしの方へ男「ヘイ

ドンドン先刻(さっき)から呼(よん)でるが一ツ物(もの)音(おと)もしない家(うち)の者(もの)へ行(い)つてしまつたのかしら

女「ハイ」

男「まだ寝(ね)ないのかえ

女「ハイ誰(だれ)かお客(きゃく)様(さま)がおありなさるやうで

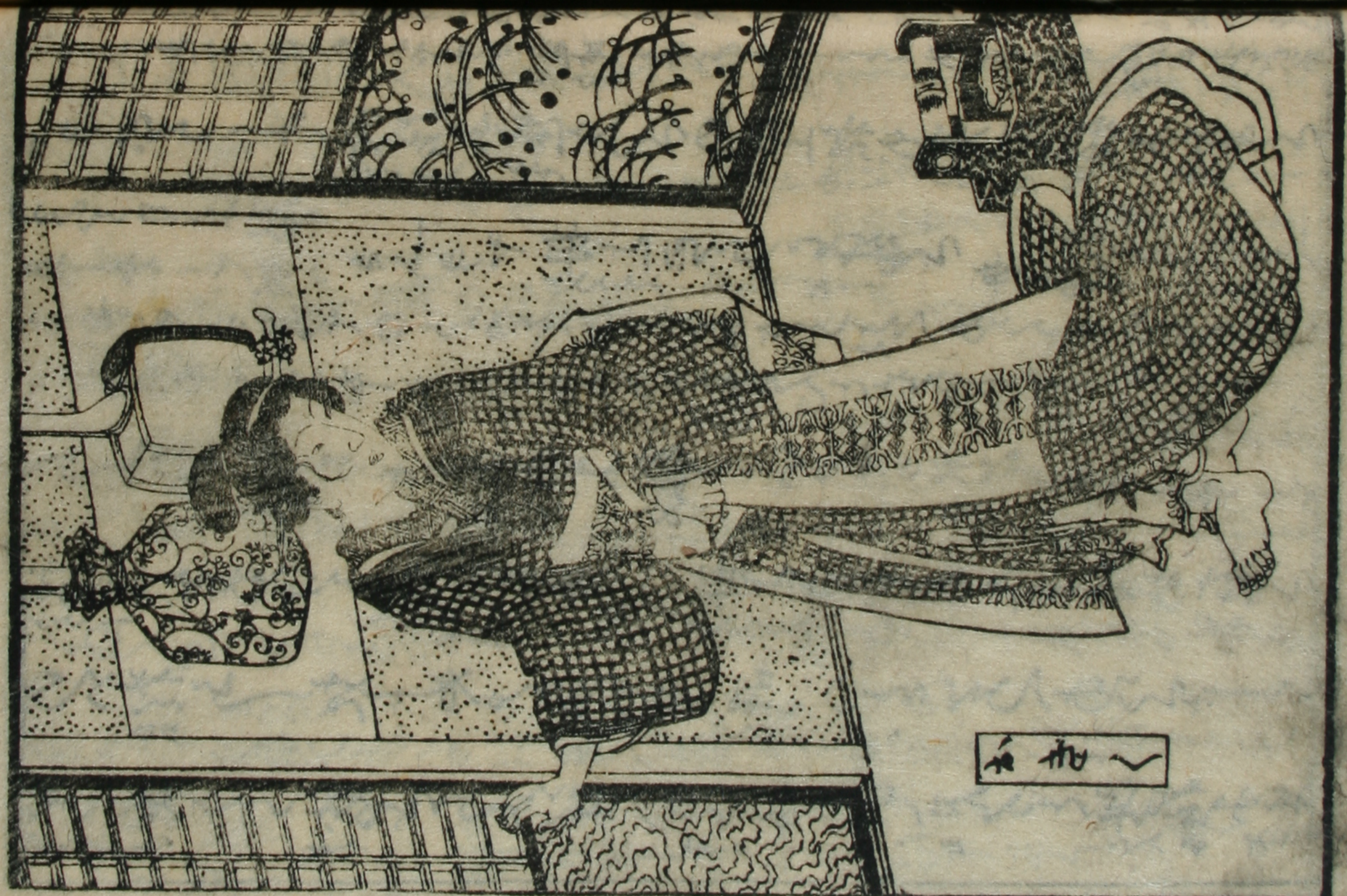
男「ハテ誰(だれ)が来(き)てゐるのだらう

あせ
在、ら家あ
あり
有がうらけ懸をあ動うさ福へ宜
ありる
うちが隊ます
男「イヤアさうして在ら家へ
うきとうふやあのお房へおぶうきあぐうる出てまし
つけふとうへまし
うこやうもあらさうやうこびいうちんせうまふせうまをこと男「イヤモウ私もあきまあんこと全
おうこのる
ごんこて格別あることが無
まうとあモう

男「又ハわんの通りとけ知らぬ老婆抱いて来ましたと申ても
ござりまする
男「私も寿「実ニ
ぐらりぐらり
ぐ何でも矯文が解宜の悪
侍が追て捨る由報えくふ
ノおまえ
ツゆ

一列ニ並ヒ迎ヒ来リ実ニ賑ハシキ事ナリ
那ノ宅ニ到リ門ニ入ルヤ否ヤ数人ノ婢女
階ヲ降リ来リ出デ迎ヘ
ざうくしく
数人ノ婢女ガ例モノ如ク居リ
ぞうくしく
出デ迎ヘ
ざうくしく
其ノ者ノ言フ所ニ
ざうくしく
依レバ井戸ノ
ざうくしく
辺ニ到リ
ざうくしく
井戸ノ辺ニ到リ
ざうくしく
早ク
ざうくしく
早ク
ざうくしく
早ク


とびきり
岡惚る人も陽て
引はつど
いま男
あざな
未詳



女ぶう「お師匠さんお菓子
きく「ハイ有がとう今年
ももらうのと降のおぼ
きく「アノ若旦那
ぐち「梅川
いそぐぞ
ぐち「何事是を活て
いそぐぞ
去うぐさまでは入
アノ活

ヲホこゑ感心(うなづく)しやうせん三味線を彈(ひう)て傍(そば)より冒(おか)されまいのサ　男「とんだ事(こと)ぢやと私の母(おつか)さんも仰(おつ)しやりまするを聞(きか)ずに出(で)ましたを後悔(こうくわい)して居(を)りまする　女「ほんにそうぢやわいなア　男「ソレ其(そ)の様(やう)に仰(おつ)しやつて下(くだ)さるのが嬉(うれ)しうござりまする　女「ヲヤ嬉(うれ)しいとは　男「ハテ私(わたし)の事(こと)を思(おも)ふて下(くだ)さるからでござりまする　女「ヲヤ思(おも)ふてとは　男「ハテ一向(いつかう)に此(この)方(かた)を　女「ヲヤ老(おい)ぼれ入(いり)のまだ　男「ハテ其(そ)の様(やう)に仰(おつ)しやつては　女「ヲヤ又(また)　男「ハテ　女「ヲヤ　男「ハテ　女「ヲヤ　男「ハテ　女「ヲヤ

きて「ヲヤヲヤあんなあらひとなら
私のやうなおとこ二人手を拍好
そんな私てまあ残おんどらまおそこ
つまらぬ人てらぐさの男「イエくる
ら何ぼもあんしまけんのんぐらもあんしく
形りふもおそぐもぶさまこのあらぐ
ヨまこと此子毎人ろ毎日どうぶく
此子たぶまで困をよく「イヽヨ親子ともおやこ
このちう
もウいけませんハヲおこそ男「アく絵ぐそ

いま今うち打ぞ如〳〵人のとも友さそう誘ひ合ふ
ト立を誘きく
ヲまつ待
ろめ
ろう
ろう
ろう

春の色連理梅巻之五畢